

J. Dyer Ball著『Cantonese Made Easy』各版本の異同 —— “個” と “的” を中心に ——

竹 越 美奈子

目 次

1. はじめに
2. J. Dyer Ballと『Cantonese Made Easy』
3. 各版本の異同
 - 3.1 目次
 - 3.2 “個”
 - 3.3 “的”
4. おわりに

1. はじめに

『Cantonese Made Easy』(J. Dyer Ball著)は1883年に香港で出版された広東語の教科書である。その後約40年に渡って改訂と増補を繰り返し、第4版(1924年)まで出版されている。この本は、実用的な口語を学ぶことを目的にしていること、音韻体系が正確であることが検証済みであること¹⁾、版を重ねて精密な改訂が加えられていることなどから、19世紀の粵語を研究する資料として中心的役割を果たすものである。筆者はこれまで日本国内に現存する第2版、第3版、第4版を資料として、19世紀以降の粵語史を研究してきた²⁾が、今回ロンドン大学図書館蔵の初版本を目にする機会に恵まれた。小文の目的は、初版から他の版本への改訂状況が、筆者がこれまでに他の資料から跡づけた粵語史の変遷を反映しているかどうかを詳細に検討することである。

2. J. Dyer Ballと『Cantonese Made Easy』

J. Dyer Ball (1847-1919) は広東生まれの英国人で、香港政庁の主任通訳を35年間務めた。³⁾ *China Review* によれば、評判の「広東語会話の達人 (a master of Cantonese Colloquial)」で

〈注〉

- 1) Cheung (2006) 参照。
- 2) 竹越 (2004), 竹越美奈子 (2005), Takekoshi (2009)。
- 3) *Who Was Who* 1916-1928, p.47. なお同書では没年が1919年2月21日となっているが、Ballの息子A. Dyer Ballによる第4版の序では1918年没と記されている。

あった。⁴⁾

『Cantonese Made Easy』には初版（1883年）⁵⁾、第2版（1888年）、第3版（1907年）、第4版（1924年）がある。⁶⁾ 各版本の書誌情報は以下の通りである。

初版：J. Dyer Ball. 1883. *Cantonese Made Easy: a book of simple sentences in the Cantonese dialect, with free and literal translations, and directions for the rendering of English grammatical forms in Chinese*. First Edition. Hong Kong: China Mail Office.

第2版：J. Dyer Ball. 1888. *Cantonese Made Easy: a book of simple sentences in the Cantonese dialect, with free and literal translations, and directions for the rendering of English grammatical forms in Chinese*. Second Edition. Revised and Enlarged. Hong Kong: China Mail Office.

第3版：J. Dyer Ball. 1907. *Cantonese Made Easy: a book of simple sentences in the Cantonese language, with free and literal translations, and directions for the rendering of English grammatical forms in Chinese*. Third Edition. Revised and Enlarged. Singapore, Hong Kong, Shanghai, Yokohama: Kelly and Walsh Limited.

第4版：J. Dyer Ball. 1924. *Cantonese Made Easy: a book of simple sentences in the Cantonese dialect, with free and literal translations, and directions for the rendering of English grammatical forms in Chinese*. Forth Edition, Revised and Enlarged by A. Dyer Ball. Hong Kong: Kelly and Walsh Limited.

これにより、初版と第2版の出版社はChina Mail Officeで第3版と第4版の出版社はKelly and Walsh Limitedであること、第3版のみシンガポール、香港、上海、横浜で発行され、他は香港で発行されたこと、Ballの死後に発行された第4版はBallの息子であるA. Dyer Ballの手による増補版であることなどがわかる。

この本を出版するにあたって、Ballが最もこだわった点は話し言葉に重点をおいて逐語訳と平易な解説を加えるということである。それは初版本の広告のコピー——a Book of Simple Sentences in the Cantonese Colloquial, with a Vocabulary containing many new words by J. Dyer Ball.⁷⁾

〈注〉

4) *China Review* vol. xi, p.258.

5) 発行年はいずれも表紙に記載の年号。香坂（1952：62）には、『Cantonese Made Easy』の発行年が1882年と記載されているが、Preface（序文）の日付、表紙に記載されている発行年ともに1883年である。なお、第2版のPrefaceの日付は1887年、第3版のそれは1902年であり、発行年より前になっている。また、Ballの息子A. Dyer Ballによる第4版の序では、第3版の発行年を1904年としている。

6) 甘於恩（2007:1669）、鄭定欧（1993：70）参照。

7) *China Review* vol. xi, p.258.

(J. Dyer Ballによるやさしい広東語の話し言葉の本。新しい語彙も満載)——とタイトルに添えられた副題——a book of simple sentences in the Cantonese dialect, with free and literal translations, and directions for the rendering of English grammatical forms in Chinese⁸⁾ (広東方言のやさしい文の本。自然な訳と逐語訳、英語の文法形式から中国語に訳すための指南つき)——に現れている。広東語は話し言葉と書き言葉の差が大きい言語の一つである。特に、普段広東語を話している人でも書くときには標準中国語で書くことが多い。宣教師によって布教目的で編纂された初期の広東語の教科書は、キリスト教の教えを広東語で伝えることに多くの頁が割かれている⁹⁾が、これらは通常格式高い書き言葉で書かれることが多く、話し言葉を学ぶには実用的ではなかった。その後、多くの教科書が出版された¹⁰⁾が、*China Review*によれば、「The good books on the subject (=Cantonese colloquial) are scarce and out of print; the books that do exist are compilations of pretentious rubbish, full of English idioms repeated *ad nauseam*. (広東語の話し言葉に関するよい書物は絶版になっていたりして不足気味である。今ある本はそれらしく見えるごみくずのかき集めで、吐き気をもよおすほど繰り返される英語の言い回しだらけである。)」¹¹⁾という状況で、話し言葉に関する実用的な本の出版が待ち望まれていた。このような状況の中で『Cantonese Made Easy』が出版され、その後版を重ねることになる。繰り返し版を重ねて出版されたということは、この本がある程度の好評をもって迎えられたということと、著者のBallが慎重に内容を吟味して、誤りを正し、言語の変化を反映させたことの現れではないだろうか。したがって、各バージョンの異同を詳細に調べることは、当時の口語の状況を知る上で大きな意義があると考えられる。

3. 各版本の異同

3.1 目次

各バージョンの目次は巻末の付表1-6の通りである。¹²⁾それによると、2版以降、INTRODUCTION (はじめに) やGRAMMAR (文法篇) には増補が加えられているが、LESSONS (本課) のタイトルと頁数は変わっていない。¹³⁾本課については基本的に同じ文章を踏襲して、音注と漢字のみ直したのである。¹⁴⁾したがって、本課における音注や漢字の改訂状況は当時の口語の変化を反映していると考えられる。以下、本課に限って各版本における“個”と“的”の改訂状況を詳しく見ていく。

<注>

- 8) 初版、第2版、第4版のもの。第3版では、Cantonese dialect (広東方言) がCantonese language (広東の言語) に書き換えられている。
- 9) 19世紀前半の広東語の教科書であるMorrison (1828), Bridgman (1839, 1841), Williams (1842) の著者はいずれも宣教師である。いずれも方言の違いや、話し言葉と書き言葉の違い、また一般庶民が使う言葉と知識階級や役人が使う言葉の違いについて敏感であった。しかしながら純粋に話し言葉だけを扱った書物ではない。
- 10) Devan (1847), Bonney (1854), Chalmers (1859), Lobscheid (1864), Castaneda (1869), Dennys (1874), Eitel (1877) など。
- 11) *China Review* vol. xi, p.258.
- 12) 第4版の目次にGrammar篇はない。付表5の該当部分は第4版の内容に基づいて筆者が作成したものである。
- 13) 第2版以降では、初版にAbbreviations (凡例) が加わっており、第4版はAbbreviations (凡例) がTone Marks and Abbreviations (声調記号と凡例) に変わっている。
- 14) 3.2, 3.3で述べるように、ごく一部文言の改訂もある。

3.2 “個”

広東語の遠称の指示詞“咽”（[ko]、声調は陰上）は、量詞の“個”（[ko]、陰去）に由来し、その変化はまず後続の量詞が“個”であるものから始まった。¹⁵⁾ この変化はすでに早期粵語資料によって検証されているが、ここでは『Cantonese Made Easy』のLESSONS（課文篇）部分の各版本を比較することにより、もう一度詳細に検討してみたい。以下、“個個”、“個隻”、“個條”など直後に量詞が続くものを指示詞とみなして、その漢字と声調を調べた。^{16) 17)}

表1は、直後の量詞が“個”の場合である。これによると、各版とも漢字は“咽”、声調は陰上である。初版発行時にすでに後続の量詞が“個”の場合には変化が完了していた——陰上で読まれ、新しい漢字である“咽”を使用していた——ことがわかる。

表1 直後に量詞“個”が続く場合の指示詞[ko]の漢字と声調表記

版（発行年）			初版（1883）		第2版（1888）		第3版（1907）		第4版（1924）	
課	頁	行	漢 字	声 調	漢 字	声 調	漢 字	声 調	漢 字	声 調
			個 咽	去 上	個 咽	去 上	個 咽	去 上	個 咽	去 上
2	6	4	1	1	1	1	1	1	1	1
2	6	25	1	1	1	1	1	1	1	1
5	12	20	1	1	1	1	1	1	1	1
8	18	6	1	1	1	1	1	1	1	1
13	28	8	1	1	1	1	1	1	1	1
合 計			5	5	5	5	5	5	5	5

〈注〉

15) 竹越美奈子（2005）、張洪年（2006）。

16) “個個”の場合、量詞“個”の繰り返し（「すべての」の意）の場合もありうる。英語訳などから判断して量詞の繰り返しの場合は数えない。

17) 表中で、声調の「去」は陰去、「上」は陰上を示す。

表2 直後に“個”以外の量詞が続く場合の指示詞 [ko] の漢字と声調表記

版 (発行年)			初版 (1883)		第2版 (1888)		第3版 (1907)		第4版 (1924)	
課	頁	行	漢 字	声 調	漢 字	声 調	漢 字	声 調	漢 字	声 調
			個 個	去 上	個 個	去 上	個 個	去 上	個 個	去 上
1	4	20	1	1	1	1	1	1	1	1
5	12	27	1	a)	1	1	1	1	1	1
7	16	3	1	* 1	1	* 1	1	* 1	1	* 1
7	16	25	1	1	1	1	1	1	1	1
7	16	27	1	1	1	1	1	1	1	1
9	20	2	1	1	1	1	1	1	1	1
10	22	12	1	1	1	1	1	1	1	1
10	22	29	1	1	1	1	1	1	1	1
11	24	11	1	1	1	1	1	1	1	1
12	26	9	1	1	1	1	1	1	1	1
12	26	13	1	1	1	1	1	1	1	1
13	28	2	1	1	1	1	1	1	1	1
13	28	25b)	1	1	1	1	1	1	1	1
13	28	c)			1	1	1	1	1	1
13	28	27d)	1	1	1	1	1	1	1	1
13	28	e)			1	1	1	1	1	1
15	32	9	2	2	2	2	2	2	2	2
15	34	21f)	1	1	1	1	1	1	1	1
			1	1	1					1
			6 1	0 6	8 1	13 6	16 3	14 5	16 3	4 5

陰上の記号とともに、上昇変音の記号 (*) がついている。

- a) 陰平。誤植の可能性が高い。
- b) 第2版、第3版、第4版では24行。
- c) 初版にはない。第2版、第3版、第4版では25行。
- d) 第2版、第3版、第4版では26行。
- e) 初版にはない。第2版、第3版、第4版では28行。
- f) 第2版、第3版、第4版では24行。

表2は、直後に“個”以外の量詞が続く場合である。大部分は、変化前——漢字は“個”、声調は陰去——の形で表されている。初版における例外は、以下の6例である。

- 1) 咽隻 $\text{ko}^* \text{chek}$ 。(Ball1883 : 16 : 3)
- 2) 個的 $\text{ko} \text{ti}$ (Ball1883 : 22 : 29)
- 3) 個隻 $\text{ko} \text{chek}$ 。(Ball1883 : 28 : 2)
- 4) 個度 $\text{ko} \text{to}^\text{p}$ (Ball1883 : 28 : 25)
- 5) 個條 $\text{ko} \text{ti}^\text{u}$ (Ball1883 : 28 : 27)
- 6) 個的 $\text{ko} \text{ti}$ (Ball1883 : 34 : 21)

このうち、1) は新しい形——“咽”、陰上——になっており、以降の版本でも書き換えられていない。2)-6) はいずれも漢字と声調が不釣り合い——“個”、陰上——である。したがって、2) 3) を除く 4) -6) が第3版以降 4)’ -5)’ のように書き換えられたのはこういった不安定さを嫌ったことによるものである。

- 4)’ 咽度 $\text{ko} \text{to}^\text{p}$ (Ball1907 : 28 : 24) , (Ball1924 : 28 : 24)
- 5)’ 個條 $\text{ko}^\text{p} \text{ti}^\text{u}$ (Ball1907 : 28 : 26) , (Ball1924 : 28 : 26)
- 6)’ 咽的 $\text{ko} \text{ti}$ (Ball1907 : 34 : 21) , (Ball1924 : 34 : 21)

4)’ と6)’ は漢字が“個”から“咽”に変わったので変化の流れに沿っているが、5)’ は声調が陰上から陰去へ書き換えられており、いわば変化と逆行している。しかしながら、これも声調を漢字“個”に合わせたからと考えられる。“咽”は陰上で読み、“個”は陰去で読むという考えが定着していたからか、もしくは漢字と発音は一対一で対応すべきであるといった意識によるものであろう。

3.3 “的”

現代広東語で複数を表す量詞“啲”([ti:] 陰上)は、19世紀初頭の早期粵語資料では漢字が“的”で発音は[tik] 陰入であった。それが、次第に発音が[tɿ:] 陰上に変化し、それに続いて漢字“啲”が使われるようになった。¹⁸⁾ Cantonese Made Easyの初版では、発音はすでに陰上 [ti:] に変化しているが、漢字は“的”が多数である。以下は各版本における漢字の使用状況である。対象としたのは統語的に量詞と考えられる [ti:] のみである。¹⁹⁾

表3によると、初版では大半(37例中32例)が古い字(“的”)であったが、第2版では大部分(43例中36例)が新しい字(“啲”)になっている。第3版で書き換えられたのは、以下の2例のみである。

- 7) a. 第2版：呢的米點賣呢。(How do you sell this rice?) (Ball1888 : 20 : 7)
- b. 第3版：呢啲米點賣呢。(How do you sell this rice?) (Ball1907 : 20 : 7)
- 8) a. 第2版：個啲鉸用阻、個鎖又爛。(The hinges are off, and the lock is broken.) (Ball1888 : 28 : 25)
- b. 第3版：個的鉸用阻、個鎖又爛。(The hinges are off, and the lock is broken.) (Ball1907 : 28 : 025)

<注>

18) Takekoshi (2009)。

19) 具体的には、名詞に先行するもの、指示詞に後続するもの、“有、俾、添”などの動詞と“快、易、平、好、貴”などの形容詞に後続するもの(“一啲”の省略と考える)を対象とした。

表 3 [ti:] の漢字表記

版 (発行年)			初版 (1883)	第 2 版 (1888)	第 3 版 (1907)	第 4 版 (1924)
課	頁	行	的 哟	的 哟	的 哟	的 哟
1	4	12	1	1	1	1
1	4	16	1	1	1	1
1	4	20	1	1	1	1
1	4	26a)	1	2	2	2
1	4	28b)	1	1	1	1
2	6	12	1	1	1	1
4	10	1	1	1	1	1
4	10	2	1	1	1	1
4	10	c)		1	1	1
5	12	3	1	1	1	1
5	12	16	1	1	1	1
7	16	16	1	1	1	1
7	16	25	1	1	1	1
7	16	26	1	1	1	1
7	16	27	1	1	1	1
8	18	6	1	1	1	1
8	18	25d)	1	1	1	1
9	20	1	1	1	1	1
9	20	2	1	1	1	1
9	20	5	1	1	1	1
9	20	7	1	1	1	1
9	20	9	1	1	1	1
9	20	13	1	1	1	1
9	20	16	1	1	1	1
9	20	17	1	1	1	1
9	20	e)		1	1	1
10	22	12	1	1	1	1
10	22	15	1	1	1	1
10	22	20	1	1	1	1
10	22	29	1	1	1	1
11	24	11	1	1	1	1
11	24	12	1	1	1	1
11	24	f)		1	1	1
11	24	21	1	2	2	2
11	24	30	1	1	1	1
11	24	31	1	1	1	1
12	26	13	1	1	1	1
13	28	g)		1	1	1
15	34	21h)	2	2	2	2
Total			32 5	7 36	7 36	7 36

- a) 第2版以降では25行。
- b) 第2版以降では27行。
- c) 初版にはない。第2版以降では16行。
- d) 第2版以降では24行。
- e) 初版にはない。第2版以降では20行。
- f) 初版にはない。第2版以降では17行。
- g) 初版にはない。第2版以降では25行。
- h) 第2版以降では24行。

7) の書き換えは“的”から“啲”だから、“的>啲”という変化に沿ったものであるが、8) は“啲”から“的”であり、変化に逆行するものである。この理由はわからないが、ただ1例だけである。第3版と第4版の漢字は全く同じである。

4. おわりに

以上、“的”と“個”の改訂状況を詳細に調べた結果、『Cantonese Made Easy』の各版本は、全体としてこれまで明らかにされてきたような変化を跡づけるものであることがわかった。

“個”については、後続の量詞が“個”の場合には指示詞を陰上で読み、それ以外は陰上のままで読むという段階を反映している。陰去>陰上の変化が一斉におこったのではなく、ある一定の条件のものから始まったことを象徴的に表していると言える。さらに改訂状況から、漢字と発音は一対一で対応するべきであるという規範意識があったことがわかる。

“的”については、初版(1883年)と第2版(1888年)の間に大きな変化がある。初版では大半が古い字であったのが、第2版で大部分が新しい漢字に書き換えられ、それ以降は大きな変化はない。新しい漢字が出現した後、比較的短時間に一斉に広まった例と考えられる。

最後に、“個”と“的”の変化の時期を比べると、“的”の方が早いことがわかった。時期の問題については、両者を比べることより、それぞれを“個”(量詞)>“嘅”(構造助詞)の変化の時期と比べるべきであろう。つまり“個”(量詞)>“啲”(指示詞)と“個”(量詞)>“嘅”(構造助詞)の変化の時期を比べることによって“個”(量詞)の変化の変遷を知ることになり、“的”(構造助詞)>“啲”(量詞)と“個”(量詞)>“嘅”(構造助詞)の変化の時期を比べることにより、量詞と構造助詞の関係が解明されるのである。これを今後の課題としたい。

付記

本研究は、愛知東邦大学2009年度個人研究費によるロンドン大学図書館への出張の成果の一部である。

引用文献

早期粵語資料

- Ball, J. Dyer. 1883. *Cantonese Made Easy*. Hong Kong: China Mail Office.
- Ball, J. Dyer. 1888. *Cantonese Made Easy* (2nd ed.). Hong Kong: China Mail Office.
- Ball, J. Dyer. 1907. *Cantonese Made Easy* (3rd ed.). Singapore, Hong Kong, Shanghai, Yokohama: Kelly and Walsh Limited.
- Ball, J. Dyer. 1924. *Cantonese Made Easy* (4th ed.). Hong Kong: Kelly and Walsh Limited.
- Bonney, Samuel W. 1854. *A Vocabulary with Colloquial Phrases of the Canton Dialect*. Canton: Office of the Chinese Repository.
- Bridgman, E. C. 1839. *A Chinese Chrestomathy in the Canton Dialect*. China.
- Bridgman, E. C. 1841. *A Chinese Chrestomathy in the Canton Dialect*. Macao: S. Wells Williams.
- Castaneda, B. 1869. *Gramatica Elemental de La Lengua China, Dialecto Cantones*. Hong Kong: De Souza & Ca.
- Chalmers, J. 1859. *An English and Cantonese Pocket Dictionary*. Hong Kong: London Missionary Society's Press.
- Dennys, N. B. 1874. *A Handbook of the Canton Vernacular of the Chinese Language*. London: Trübner & co./ Hong Kong: China Mail Office.
- Devan, T. T. 1847. *The Beginner's First Book in the Chinese Language (Canton Vernacular)*. Hong Kong: China Mail Office.
- Eitel, E. John. 1877. *A Chinese Dictionary in the Cantonese Dialect*. Hong Kong: China Mail Office.
- Lobscheid, W. 1864. *Grammar of the Chinese Language (2 vols)*. Hong Kong: Office of the Daily Press.
- Morrison, Robert. 1828. *A Vocabulary of the Canton Dialect*. Macao: G. J. Steyn & Brother.
- Williams, S. Wells. 1842. *Easy Lessons in Chinese*. Macao: Office of the Chinese Repository.

英文

- Cheung, Hung-Nin Samuel. 2006. "One Language, Two Systems: A Phonological Study of Two Cantonese Language Manuals of 1888", *Bulletin of Chinese Linguistics* Vol.1, No.1, pp.171-199.
- Takekoshi, Minako. 2009. "The Historical Change of [ti] in Early Cantonese Texts", *Papers and abstracts of the 17th Annual Conference of the International Association of Chinese Linguistics*, p.316. Paris: Ecole Des Hautes Etudes En Sciences Sociales.
- Who Was Who, 1916-1928*. 1947 London: Adam & Charles Black.

日文

- 香坂順一 1952 「広東語の研究」『人文研究』第3巻第3号、35-63頁。
- 竹越美奈子 2004 「19世紀～20世紀広東語資料に見られる遠称指示詞表記の変遷」『平井勝利教授退官記念中国語学・日本語学論文集』、白帝社、217-228頁。

中文

- 甘於恩 2007 『粵語与文化研究参考書目』 広東科技出版社。
- 張洪年 2000 「早期粵語中的變調現象」『方言』第4期、299-312頁。
- 張洪年 2006 「早期粵語「個」的研究」『山高水長：丁邦新先生七秩壽慶論文集』、813-835頁。
- 鄭定歐 1993 『廣州話研究論著索引』 香港文化教育出版社。
- 竹越美奈子 2005 「廣州話遠指詞“個”的歷史演變」『中国語文研究』第2期（総第20期）、19-24頁。

付表1 各版本の序文対照表

初 版	第2版	第3版	第4版
Preface (序文)	<p>Preface to the First Edition (初版序)</p> <p>Preface to the Second Edition (第2版序)</p>	<p>Preface to the First Edition (初版序)</p> <p>Preface to the Second Edition (第2版序)</p> <p>Preface to the Third Edition (第3版序)</p>	<p>Preface to the Fourth Edition (第4版序)</p> <p>Preface to the First Edition (初版序)</p> <p>Preface to the Second Edition (第2版序)</p> <p>Preface to the Third Edition (第3版序)</p>

付表2：各版本の「はじめに」対照表

初 版	第2版	第3版	第4版
Introduction (はじめに)	<p>INTRODUCTION (はじめに)</p> <p>The Cantonese Dialect (広東方言) /The Correct Pronunciation of Pure Cantonese (標準広東語の正しい発音) /The Tones (声調) /Methods of Describing Tones (声調表記法) /List of Tones (声調一覧) /Division of the Tones (声調の分化) /Description of the Tones (声調の記述) /Marks to Designate the Tones (声調記号) /Tonic Exercises (声調の練習) /Aspirated and Non-aspirated Words (有気音と無気音の語) /Long and Short Vowels (母音の長短) /Pronunciation (発音) /Syllabary (音節)</p>	<p>INTRODUCTION (はじめに)</p> <p>The Cantonese Language (広東語) /The Court Pronunciation of Pure Cantonese (標準広東語の公式の発音) /The Tones (声調) /Methods of Describing Tones (声調表記法) /List of Tones (声調一覧) /Division of the Tones (声調の分化) /Description of the Tones (声調の記述) /The Variant Tones (声調の変化) /Marks to Designate the Tones (声調記号) /Tonic Exercises (声調の練習) /Aspirated and Non-aspirated Words (有気音と無気音の語) /Long and Short Vowels (母音の長短) /Pronunciation (発音) /Syllabary (音節)</p>	<p>INTRODUCTION (はじめに)</p> <p>The Cantonese Dialect (広東方言) /The Correct Pronunciation of Pure Cantonese (標準広東語の正しい発音) /The Tones (声調) /Methods of Describing Tones (声調表記法) /List of Tones (声調一覧) /Division of the Tones (声調の分化) /Description of the Tones (声調の記述) /The Variant Toned (声調の変化) /Marks to Designate the Tones (声調記号) /Tonic Exercises (声調の練習) /Aspirated and Non-aspirated Words (有気音と無気音の語) /Long and Short Vowels (母音の長短) /Pronunciation (発音) /Syllabary (音節)</p> <p>Notes (注) /Chinese Tones and musical notes (中国語の声調と音符)</p>

付表 3：各版本の正誤表と補遺対照表

初 版	第 2 版	第 3 版	第 4 版
			Errata and Addenda (正誤表と補遺)

付表 4：各版本の課文篇対照表

初 版	第 2 版・第 3 版	第 4 版
LESSONS (課文篇)	LESSONS (課文篇)	LESSONS (課文篇)
	Abbreviations (凡例)	Tone Marks and Abbreviations (声調記号と凡例)
The Numerals (数字)	The Numerals (数字)	The Numerals (数字)
Lesson I Domestic (家庭内)	Lesson I Domestic (家庭内)	Lesson I Domestic (家庭内)
Lesson II General (一般)	Lesson II General (一般)	Lesson II General (一般)
Lesson III General (一般)	Lesson III General (一般)	Lesson III General (一般)
Lesson IV General (一般)	Lesson IV General (一般)	Lesson IV General (一般)
Lesson V General (一般)	Lesson V General (一般)	Lesson V General (一般)
Lesson VI Relationships (親族)	Lesson VI Relationships (親族)	Lesson VI Relationships (親族)
Lesson VII Opposites (反対語)	Lesson VII Opposites (反対語)	Lesson VII Opposites (反対語)
Lesson VIII Monetary (貨幣)	Lesson VIII Monetary (貨幣)	Lesson VIII Monetary (貨幣)
Lesson IX Commercial (商業)	Lesson IX Commercial (商業)	Lesson IX Commercial (商業)
Lesson X Commercial (商業)	Lesson X Commercial (商業)	Lesson X Commercial (商業)
Lesson XI Medical (医療)	Lesson XI Medical (医療)	Lesson XI Medical (医療)
Lesson XII Ecclesiastical (教会)	Lesson XII Ecclesiastical (教会)	Lesson XII Ecclesiastical (教会)
Lesson XIII Nautical (航海)	Lesson XIII Nautical (航海)	Lesson XIII Nautical (航海)
Lesson XIV Judicial (裁判)	Lesson XIV Judicial (裁判)	Lesson XIV Judicial (裁判)
Lesson XV Educational (教育)	Lesson XV Educational (教育)	Lesson XV Education (教育)

付表 5：各版本の文法篇対照表

初 版	第 2 版	第 3 版	第 4 版
GRAMMAR (文法篇)	GRAMMAR (文法篇)	GRAMMAR (文法篇)	GRAMMAR (文法篇)
Nouns (名詞)	Nouns (名詞)	Nouns (名詞)	Nouns (名詞)
Articles (冠詞)	Articles (冠詞)	Articles (冠詞)	Articles (冠詞)
Classifiers, &c. (量詞とその例)	Classifiers, &c. (量詞とその例)	Classifiers, etc. (量詞他)	Classifiers (量詞)
Adjectives (形容詞)	Adjectives (形容詞)	Adjectives (形容詞)	Adjectives (形容詞)
Numeral do. (数的形容詞)	Numeral Adjectives (数的形容詞)	Numeral Adjectives (数的形容詞)	Numeral Adjectives (数的形容詞)
Pronouns (代名詞)	Pronouns (代名詞)	Pronouns (代名詞)	Pronouns (代名詞)
Adjective Pronouns (付属的代名詞)	Adjective Pronouns (付属的代名詞)	Adjective Pronouns (付属的代名詞)	Adjective Pronouns (付属的代名詞)
Verbs (動詞)	Verbs (動詞)	Verbs (動詞)	Verbs (動詞)
Adverbs (副詞)	Adverbs (副詞)	Adverbs (副詞)	Adverbs (副詞)
Prepositions (前置詞)	Prepositions (前置詞)	Prepositions (前置詞)	Prepositions (前置詞)
Conjunctions (接続詞)	Conjunctions (接続詞)	Conjunctions (接続詞)	Conjunctions (接続詞)
Interjections, & c. (間投詞とその例)	Interjections (間投詞)	Interjections (間投詞)	Interjections (間投詞)
Finals (文末助詞)	Finals (文末助詞)	Finals (文末助詞)	Finals (文末助詞)
Simple Directions (簡単な指南)	Simple Directions (簡単な指南)	Simple Directions (簡単な指南)	Simple Directions (簡単な指南)
Final Directions (最終指南)	Final Directions (最終指南)	Final Directions (最終指南)	Final Directions (最終指南)

付表 6：各版本の付録と索引対照表

初 版	第 2 版	第 3 版	第 4 版
	APPENDIX (付録)	APPENDIX (付録)	APPENDIX (付録)
	Excursus 1 (補 1) Chinese Grammar (中国語の文法) 1	Excursus 1 (補 1) Chinese Grammar (中国語の文法)	Excursus 1 (補 1) Chinese Grammar (中国語の文法)
	Excursus 2 (補 2) Differences between the Book Language and Colloquial (書面語と口語の違い)	Excursus 2 (補 2) Differences between the Book Language and Colloquial (書面語と口語の違い)	Excursus 2 (補 2) The Differences between the Book Language and Colloquial (書面語と口語の違い)
	Excursus 3 (補 3) Reasons why Europeans speak Cantonese poorly (ヨーロッパ人が広東語を話すのが下手な理由)	Excursus 3 (補 3) Reasons why Europeans speak Cantonese poorly (ヨーロッパ人が広東語を話すのが下手な理由)	Excursus 3 (補 3) The Reasons why Europeans as a rule are such poor speakers of Cantonese (ヨーロッパ人が広東語を話すのが下手な理由)
		Excursus 4 (補 4) Titles of Respect (尊称)	Excursus 4 (補 4) Titles of Respect (尊称)
		Excursus 5 (補 5) Trisyllabic Compounds (3 音節語)	Excursus 5 (補 5) Trisyllabic Compounds (3 音節語)
	INDEX (索引)	INDEX (索引)	INDEX (索引)